

第4回 4大学合同ワークショップを終えて

先進理工学専攻 2年 村上晃平

今回の4大学合同ワークショップでは、自分自身の成長と不十分な要素の実感という二つの点で、大きな成果が得られた。まず、これらの二点の成果は、共にワークショップ内で課されたグループディスカッション内で実感できたものである。一点目の自分自身の成長の実感としては、主にディスカッションに臨む姿勢である。これまでの自分自身のディスカッションに対する姿勢としては、前提として自分の意見が正しく、相手の意見もある程度踏まえた上で、自分自身の意見をいかに基盤にするか、つまり、議論の方向性の決定打になるかを重視していた。しかし、今回のディスカッションでは、自分の意見に対する発言よりも、半ば無意識的に他の学生の意見に対して、その意見をより発展させるように促す質問をしていたように思える。後述するように自分の考えが上手くまとまらなかったという理由もあるが、これは、昨夏の第2回4大学合同ワークショップで学んだ「コーチング」を、ゼミでの他学生の研究に関するディスカッションなどの様々な場面で意識的に行ってきた成果と考えることができる。また、相手から情報を引き出し、自分の中で客観的に整理をして相手に伝えることもできた。一方で、これらのディスカッションを通して感じた自分の至らなさは、与えられた時間の中で自分の考えをまとめる能力の至らなさである。今回のグループディスカッションにおいて、我々のグループでは、ディスカッションの冒頭に5~6分を自分の意見をまとめる時間を設けた後、それぞれの意見を出し合うこととした。私はこの時間の中で、現状・問題・解決策といったフレームワークを用いて意見をまとめようと試みたものの、結局まとめることができないまま、つまり意見が散乱した状態で議論を始めてしまった。他のグループメンバーと比べてみると、例えば、学年が一つ下の学生は、社会的背景を盛り込んだ上に論理構成も整った意見を述べていて、短時間で自分の意見を最大限まとめ上げるという能力に関して未熟であることを実感した。

このように、ワークショップの中で行ったディスカッションを通して、自分の成長と不足している部分を顕著に感じることもできた。また、このような経験ができたのは、日頃から共に学生生活を共にしているわけではない学生とディスカッションを行ったことに由来しており、本質的には、相手の意見や考え方に先入観を持たずに接することがいかに重要であるかの一例と考えられる。これは日頃の研究生生活にも同様と考えることができ、研究生生活を含む今後の学生生活のより一層の充実を期待したい。